平安講社は，平安神宮と神苑，さらには時代祭の維持や崇敬者の組織化を目指して平安京遷都千百年紀念祭協賛会の幹事会が設立を提案し，明治２８年（１８９５）に発足した。当初は，市民が１日１厘の賽銭を奉納する提案であった。講社の組織は，当時の京都の行政区分に従い上京区，下京区，愛宕郡，葛野郡の４地区を６「社」に区分し，各社がそれぞれの行列を担当することとした。

その後，市域の拡大に伴い平安講社も大きくなり，今日では１０社から成る。そして各社は，概ね２０前後の元学区を単位とする「組」からなり，各組が輪番でその年の行列を担当する。したがって，各元学区は，概ね２０年に一度，大役が回ってくることになる。その役が回ってくると，元学区では，当該年度の行列にかかる費用の一切を負担する必要がある。このため，多くの元学区では，２０年に一度の経費を確保するため，元学区全体で古紙回収に取り組む。このことからも，時代祭は京都市民の日常に深く意識された市民祭ということができる。

さて，当番の前年には，時代祭の実行委員会が学区に設けられ，当番に当たっている学区の様子を逐一，見学することにより翌年の行事内容を確認していくのである。その結果を踏まえて，役員体制と業務内容を確定し，当番に備える。

各社には，専属の「お祭り屋」が存在する。彼らは，その社の装束，用具の一切を維持修理などを含めて管理する。行列に必要な馬や学生ボランティア，「奴」など特殊な技能を持つ人を手配し，装束に慣れていない人には着付けも教える。平安神宮からの帰りのバスや弁当などの手配も行う。彼らの存在なしには，時代祭は運営できないほど大切な存在である。多くは世襲のように代々，その業務を引き継いでいる。

さて，当番の年である。自治連合会会長が運営委員長となり，女性会等，各種団体の役員が運営委員となり，当日の進行表と役割分担表を作成する。この際にも，「お祭り屋」の指導と手伝いが欠かせない。そして，何度もリハーサルを繰り返す。その時に会場となるのは，学校である。

そして，祭の１週間前，各学区の代表者は平安神宮に集まり，行列の無事を神前に祈願する時代祭宣状祭を営む。祭儀終了後に宮司から行列への参役の任命書にあたる宣状が授与される。その夜，地元の学校に行列に参役する運営委員が集まり，着付けのリハーサルを行う。「お祭り屋」のメンバーが手分けをして，手際よく草鞋，傘，脚絆，手甲，袴，刀などの着付けを教えていく。前日に，もう一度リハーサルをし，祭の当日には朝着付けを行い，学区に集合する。

当日，学校は大変な賑わいとなる。朝から，百名を超える学生ボランティアが集合し，女性会のメンバーが中心となって，次々と着付けをしていく。そうこうしているうちに，馬も集合する。運動場で祭の行進のリハーサルをした後，学区内を練り歩き，祭に支援をした学区民にお披露目をする。そこから，京都御所の集合場所に集まり，行列のスタートに備える。

各社が担当する行列は１０列であり，残りの１０列は，京都青年会議所，五花街のお茶屋組合，京都料飲組合，大原農協婦人会，白川女風俗保存会など，ゆかりの団体が担当する。

写真2-30　学校での準備